

# 『だれかの笑顔のために』

## 「人権の花」が大きく育っています

菊水小学校では、昨年度『みんなを大切に 笑顔の花を咲かせよう!』のテーマのもと「人権の花」運動に取り組みました。6月21日の「伝達式」でたくさんのお花をいただき、みんなで育てたそのお花からたくさん種をとることができました。そして、取組の最後である11月22日の「終了式」では、育てた種を風船につけてとばすことができました。その後、大分県の津久見小学校の先生や、大分市、九重町、臼杵市の方から、種が届きましたとお便りが届き、みんなの思いが届いた気持ちがしてとてもうれしかったことを思い出します。

そしてまたうれしいことがありました。その種を大切に育てていただいた方からお手紙と写真が9月9日に届いたのです。現4年生の佐久間壮二郎君が飛ばした種が大分県日田市天瀬町の山に落ちていたのだそうです。それを見つけていただいた方が、種を植え、育てていただいたのです。それだけではなく、育った花の写真3枚(右はそのうちの1枚)を下の手紙に添えて送っていただきました。本当にありがたいと感謝しています。



近くの山でシイタケの木を切っている時に、この紙袋を見つけました。中に入っているひまわりの種を6月ごろ畑に植えたら、こんなに大きく育ちました。これからいろいろな活動をしてください。

## 悪口か花束か (※ゴシック体の部分は鎌田實 著「相手の身になる練習」小学館より引用)

今では、多くの方が新型コロナウイルスに感染した経験を持ち、5類変更後は、感染状況に敏感に反応する状況ではなくなりました。しかし、最初のころは新型コロナに感染した人を多くの人が非難するという風潮が起こったのです。

非難の対象は、ライブハウスや飲食店などにも向けられました。さらに、医師や看護師と言った医療従事者に対しても、偏見や差別の目が向けられました。医師や看護師を親にもつ子どもが、保育園や幼稚園への登園を拒否されたり、友達から仲間外れにされたりしたというのです。多くの医療従事者が、過酷な労働の中で、感染を広げないように神経をすり減らしながら患者さんを診ています。自分自身は人の命を支えることに使命感を持っていたとしても、家族がつらい目にあうというのは、なんともやりきれない気持ちになったことでしょう。

コロナ禍で素敵なことも起きています。ある女性タレントが濃厚接触者となり、2週間の自宅待機となりました。感染は確定していませんでしたが、その人の住んでいるマンションではエレベーターや玄関などが消毒されたといわれます。きっと、そのタレントは他人に迷惑をかけてしまったと肩身の狭い思いをしたことでしょう。一步も外へ出ず、2週間の隔離期間が終わりました。初めて外へ出て、ポストを見ると、小さな花束が入っているのに気づきました。『おめでとうございます。自宅待機の2週間、何もなくてよかったです。』手紙も添えてありました。タレントの女性は、感激で涙があふれて止まらなかったといわれます。人間は、こんなにあたたかなこともできるのです。

では、花束を贈る人と、感染者をバッシングする人とはいったい何が違うのか。ただ一つ違いがあるとなれば、「相手の身になることができたかどうか」だと思います。

花は人と人をつなぐ大きな力があるのだと、今回の出来事からも感じることができました。